

博士學位論文審査要旨

2017年6月12日

論文題目： 近世京焼の考古学的研究

学位申請者： 角谷 江津子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 松藤 和人

副査： 文学研究科 教授 西岡 直樹

副査： 歴史資料館 准教授 浜中 邦弘

要 旨：

本論文は、京都市上京区に所在した公家屋敷跡出土の京焼を取り上げ、考古学的方法にもとづいて編年をおこない、京焼の実態と歴史的な変遷の解明を試みたものである。京焼については、江戸時代に野々村仁清、尾形乾山が出て優雅な色絵様式を完成し日本の工芸史上一時を画したが、遺跡出土の陶片にもとづく考古学的研究は1970年代まで待たなければならなかった。

本書で用いる考古学的方法は、1970年代に同志社大学今出川校地内の中・近世遺跡の調査で確立されたもので、廃棄時点での同時性を示す「一括遺物」を分析単位として、年代が判明する火災層との層位的関係から一括遺物の年代上限もしくは下限を決定する方法である。また千年の歴史をもつ京都では、時間的変化に敏感な土師質皿が古代から近世まで普遍的に見いだされ、それらの型式変化にもとづいて「一括遺物」の時間軸を確定することが可能である。出土遺物の時間的位置を独自の方法で決定できる考古学的方法は、伝世品にもとづく従来の研究とは明瞭な一線を画すものである。

京焼は、京都盆地の周辺にいくつかの窯場が推定されるが、窯跡自体の調査に乏しく、生産の実態が不明であった。近年、京都市内の発掘調査の進展によって、高火度焼成による京焼の生産に先行して「三条せともの屋町」ほかで軟質施釉陶器を生産していたことが明らかとなったが、生産規模等については不明な点が多い。著者は、肥前鍋島藩窯で京焼を模倣焼造した「肥前産京焼風陶器」と京都市内で出土した京焼との詳細な比較研究をおこない、前者について「京焼の丸碗と平碗という器形のみを模倣し、文様は京焼にはあまりみられない楼閣山水文を鉄絵によって画一的に描き、京都の窯名の「清水」だけをとりあげて製品に押印したもの」と結論づけた。

同志社校地出土遺物の検討にもとづき、京焼を弁別する基準として①色調、②胎土、③器厚、④器形、⑤装飾、⑥意匠、⑦文様描写の7つの要素を抽出し、同志社校地の8地点出土の京焼について年代的考察を試み、時期差による変遷を明らかにしたことは特筆される業績といえる。また同志社校地出土の京焼について0段階～VI段階を設定し、公家町遺跡出土の京焼の年代観と対比するなど、出土京焼の編年案を提示したことは先駆的な業績として評価され、今後の京焼研究に一つの指針をあたえるものであろう。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2017年6月12日

論文題目： 近世京焼の考古学的研究

学位申請者： 角谷 江津子

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 松藤 和人

副査： 文学研究科 教授 西岡 直樹

副査： 歴史資料館 准教授 浜中 邦弘

要 旨：

上記審査委員3名は、2017年6月10日17時30分から20時30分まで、同志社大学徳照館第1共同利用室において、学位申請者の専門分野に関する知識を中心に口頭による学力確認をおこなった結果、該博な知識を有することを確認した。

また語学力（フランス語）に関しても十分な学力を有することを確認した。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 近世京焼の考古学的研究

氏名： 角谷 江津子

要旨：

本論文は、遺跡出土の京焼を研究対象としその概念を考古学的に検討したうえで編年研究をおこない、京焼の実体と歴史的変遷の解明を目的としたものである。京焼を「近世京都で生産された陶磁器」と定義した。

京焼について、京都を生産遺跡であり消費地遺跡の一拠点とみなす。京焼を生活用具の一部を構成するものと認識し、遺跡出土の京焼を考古学的方法によってその特徴を抽出した。具体的には一括遺物を検討・分析しその変遷をたどるという研究方法をもって、編年的研究の成果を発表することを目的とした。京都市内の京焼消費遺跡として、同志社校地と平安京左京北辺四坊（公家町遺跡）をその中心とした。

第1章は、同志社新島会館別館地点の調査において近世の遺構から大量の国産天目碗が出土したことから、この背景となった歴史について考察したものである。『蔭涼軒日録』から中世寺院の儀式としての茶礼のありかたを述べ、遺物の出土状況を姥柳町遺跡（京南蛮寺跡）と比較したうえで『日本イェズス会礼法指針』から読みとれる、宣教師がみた当時の日本の茶について言及し、さらに相国寺旧境内遺跡の既往の調査成果と比較して『津田宗久茶湯日記』から織田信長の茶会をみて相国寺における喫茶から茶の湯への展開を研究した。近世寺町地域の日常における茶の風習は、茶礼、喫茶、茶の湯とは異なる質素なあり方を示すことが明らかとなった。

第2章では、京焼の生産の実像について検討した。高火度焼成による京焼生産以前に窯業生産が開始され、京都で軟質施釉陶器を生産したことを明らかにした。京都においてはまず軟質施釉陶器の生産が始まり、その後元本能寺南町出土品にみられる、注文に応じて茶陶を中心に多様な意匠でまとまった量の軟質施釉陶器を生産した様相、東八幡町では軟質施釉陶器の生産を継続しつつ京焼をも生産していくという様相を把握した。数種の印銘が存在することから上絵付の目的で複数の窯場から陶器の素材となる素地を持ち込んだと推定され、これが当地における窯業生産の実態を示すものであったと結論した。

第3章では、肥前産京焼風陶器と京焼の比較研究から、肥前産京焼風陶器を「京焼の丸碗と平碗という器形のみを模倣し、文様は京焼にはあまりみられない楼閣山水文を鉄絵によって画一的に描き、京都の窯名の「清水」だけをとりあげて製品に押印したもの」と定義した。肥前の生産遺跡の出土状況から、新島会館地点出土の肥前産京焼風陶器が鍋島藩窯で生産されたものとし、1680年代頃から18世紀前半頃の京都における、生産地を異にする両者の消費の状況をあらわすものであると論じた。肥前産京焼風陶器が「清水」印銘を採用したことについて、相伴する京焼が「清水」印銘をもたなかったことから肥前産京焼風陶器出現期の京焼研究をすすめ、『隔莫記』『入道真敬親王日記』に清水焼の記事を見出し、伝世資料中の「清水」印銘作品が江戸時代初期から中期にかけて京都で製作された「古清水」と総称されている陶器の中に存在することから、新島会館地点出土の京焼が古清水の範疇に入るものであることを確認した。

第4章は、同志社校地出土遺物の検討にもとづき、京焼を分別する基準を提示したものである。①色調②胎土③器厚④器形⑤装飾⑥意匠⑦文様描写の7要素をあげ、同志社校地の8地点出土の京焼についてこの7要素を研究し、年代的考察を試みた。③の器厚が薄いものから厚いものへと変わり④の器形では丸碗・平碗・変形皿に杉形碗・火入・半筒形碗・筒形碗・蓋類があらわれ⑤の装飾技法では銹絵染付に色絵が加わり、さらに銹絵のみや白泥による装飾がおこなわれ⑥の意

匠では草花文主体から無文の製品が出現し、⑦の筆致では精緻な描法から、鉄顔料によって塗りつぶす、一筆で大まかな描き方となる、といった時期差による変遷をとげていることを明らかにした。

第5章は、近世京都の遺跡出土の京焼と信楽焼を主題とし、京都市域の27地点出土の信楽産施釉陶器と共伴遺物を取りあげて考察したものである。京都市域では18世紀中頃から信楽産施釉陶器の灯明皿、鍋蓋が出土し、この時期から京都で流通したものと考えた。同一器種の中に京焼がみられ、両者が併用して消費されたと考えられる。灯明皿・鍋蓋はこれまでの京焼になく、京焼と判断する基準からはずれており京焼の器種拡大とみなした。信楽産施釉陶器は胎土が緻密で硬く焼成され規格性をもつ。京焼は一時的に普及品の生産を試みるが量産に移行せず、信楽産施釉陶器にこれを委ねるという様相を明らかにすることができた。

第6章は、公家町遺跡出土の京焼について報告書で採用された「基準資料」と、「主要遺構」を中心とした2つの年代観を再検討し、XI期古段階からXIV期中段階まで、一遺跡出土の京焼ならびに軟質施釉陶器の消費状況について四期11段階にわたって編年をおこなった。京焼の変遷をたどれば、18世紀代「京都・信楽系陶器」と呼称される時期（京都から信楽へ量産器種の生産が移行する時期）を経て、京焼は装飾技法と印銘において新たな展開をみせ、器形では煎茶具が中心となる事実を知ることができた。

第7章は、禁裏御用品の京焼について、公家町遺跡の調査で出土した遺物を対象として検討したものである。禁裏御用品の京焼はXII期中段階から出現し、XIII期古段階と中段階には出土せずXIII期新段階で再度現れる。共伴した他の京焼と比較しその変遷をたどれば、禁裏御用品の京焼は「信楽における施釉陶器生産の影響を受けることなく京焼の伝統的な器形を保ち、古来の銹絵染付技法によって天皇家を象徴する意匠である16弁菊花文の装飾を踏襲するもの」と結論づけられる。これはまさに、普及品が存在せず量産を目的としない、京焼の典型的な姿であったといえる。

第8章では、同志社女子大学(常盤井殿町遺跡)の調査で報告された土師器の編年案をもとに、出土京焼と当遺跡の既往の調査で出土した京焼について比較検討した。当遺跡において京焼が出土するのはI期新段階から、信楽産施釉陶器が出土するのがII期新段階からである。I期新段階で丸碗、向付、火入、II期古段階で平碗、鬘水入、中段階で半筒形碗があらわれ、装飾では色絵・金彩と銹絵・銹絵染付が同時にあらわれ、白泥、白化粧染付へと展開することが判明した。II期新段階から信楽産施釉陶器が出土する。さらに当地における半球型の丸碗と若松文碗の共伴関係を明らかにした。

第9章は、同志社校地出土の京焼について0段階～VI段階までを設定し、公家町遺跡出土の京焼の年代観を表にまとめたものである。0段階以前に高火度焼成鉄釉碗、0段階から丸碗、平碗、鉢、向付、火入、容器等の器形が出そろい、I段階で研究の対象とした全遺跡において京焼が出土する。I段階後半に相当するXII中段階で京都産の鍋と灯明皿が出現。器形が多様となり印銘に「音羽」が入り文様の筆致が精緻なものと類型化するものに細分され、盛り上げ・塗りつぶす・白泥・鉄による太筆の新描法を確認した。II段階では器形に杉形碗が出現。前段階と比較して器壁が肥厚するが装飾は銹絵染付、色絵ともに精巧な筆致が継続する。III段階においては前段階の京焼よりさらに肥厚し調整が粗い丸碗・半筒形碗、半球形丸碗・灯明皿等、信楽で生産されるもの原型と考えられる器種が出現する。IV段階では信楽産施釉陶器が大量に出土する。「錦光山」銘継続。装飾において白化粧染付、白化粧に緑彩・褐彩・青絵の新技法出現。V段階では京焼の印銘は「霞晴山」「錦光山」「岩倉山」など山号を使用する。VI段階では陶工銘をもつ染付磁器が出現する。煎茶具は在銘で、陶家名を施す京焼の伝統を踏襲する。

付篇Iは、遺跡出土の小町紅銘紅容器について考察したものである。京都では18世紀半ば頃に白磁紅皿と色絵紅猪口、18世紀末頃に赤絵の紅猪口が出現。初め商標は「京都本家小町紅」、江戸時代後期に「小町紅京都四条遍に平」が出土し19世紀代まで存続する。江戸遺跡では18世

紀第4四半期から出現し19世紀第1四半期に「小町紅京都四条遍に平」「たかき」「いせ五」、19世紀第2四半期に「新町本家お笹紅」、19世紀第4四半期「大坂心齋ばし筋」がみられた。「小町紅」が20世紀まで販売されていたことが遺物から明らかとなった。関西では大坂城周辺から「小町紅」「大坂新町笹紅屋」兵庫津遺跡から「兵庫通上」明石城武家屋敷では「大坂新町お笹紅」、滋賀県肥田城遺跡から「の吉」「小町紅」、彦根藩家老屋敷から「小町紅」と描く紅猪口が出土。「紅皿」と「紅猪口」が遺跡で共伴し、「小町紅」商標があることで紅容器と特定される。紅猪口は商標が書かれた店に持参して買ったものと推察し、商標はこの目的で記されたものであると結論した。

付篇Ⅱでは、幕末から明治期の近代京都の遺跡出土遺物について研究した。公家町遺跡の発掘調査において柳原家の屋敷地からイギリス製水差・皿が出土した。水差と皿はプリントマークから操業期間が前者は1862年～1882年、後者は1867年～1875年と判明した。出土遺構の年代は19世紀中頃と報告されており、輸入後時をおかずに廃棄されたものと推定した。柳原家は明治2年に東京に移転、この屋敷を新島襄が借入れ明治9年から女子教育を開始した。翌年女学校は新校舎完成にともなって上京区寺町西入の現在地に移転。このことから旧柳原邸跡発掘調査で検出した遺構は、廃絶年代を柳原家東京移転の明治2年（1869）と女学校移転の明治11年（1878）の2時期に設定することができる。出土したイギリス製水差と皿は、実用性と廃棄年代から女学校に関わる遺物である可能性が高いと結論した。